夕刊 磐城新聞
三月二十四日發行
（日曜祭日翌日休刊）
東京振替一〇六・五五八番

新居寸感

山本生

木の香も新しい松風莊へこないだ引越して來た。靜かなこと、人のけはい一つない。遠くで市電のきしる音がかすかにきこえる。カラカラと學生らしい下駄の音が街上から寒空へ吸はれて行くのもほんの時々だ。部屋のガスのもえる音がしてゐるだけだ。ゆだんはあちら熱くなつすらしく、んと時々音をたてゝゐた。わたしはこの靜けさにひたつてゐる。久松學舍にて、出身校も在籍校も、目的も、生活態度も、人生觀もまことにまちまちの學生諸君と一しよに暮したことも、ほんとに面白かつたしためにもなつた。けれども論文もまとめなくてはならぬし、讀まねばならぬ本も研究室にも上野にもたまつてゐるので、新寮を期して讀書三昧の生活にはいるべく、わたくしにとつてはぜいたくすぎるこのアパートに引越して來たわけだ。

○

今日はとてもいゝ火鉢を買つた。瀬戸ものだが朱であしらつて支那式の模様があつて、火をいけてふたをすればおこたにもなるといふ可愛いゝのだ。くにかへる時こはさぬやうに持つて歸つて妹の倫子に與へたらさぞ嬉ぶだらうと今からほゝえましく思つてゐる。

○

先度鈴田先生のところで晝食のごちそうになり、滿洲國の讀本をつくつてゐられる仲間の一人齋藤氏にあちらの話をきいた。色々面白かつたが文字出來な先生のお話や座談抄に書きめぐ〻にうつつてき机に向ひ初めに座談抄を書いた。何とか言ふ華族の身にきいて居られたしらへの論など銘記すべきものだと思つた。

○

兩國の溜場所もあすが千秋樂だ。人氣どかふ入によつて左右せられるもののかなさをしみじみ思ふ。六十九連勝の強豪双葉山が七十回目にみそなめの土をつけた。つゞいて三日土をつけしまつた。氣の早い江戸ッ子はもう豚葉山だといつてゐた。それから後も勝つたり負けたりらちがあかぬ。ターキーが悲觀してゐる寫眞が新聞に出たりしてもらちがあかぬ大ていのものは負けるとまだかいといつて氣味よがつてゐる。

集のはり紙を吹くうそ寒い三月の風　泰民

憶赤穗義士

錦雲　小野務平

臥薪嘗膽始成功
慰得先君至至忠
雨雪寒喧三百歳
江湖誰不作遺風

3月25日

△川中島の戰（弘治三）△始めて電燈を點す（明治一一）△對英米永代借地權解消交換公文調印終了（昭和一二）

天氣豫報

小名濱測候所觀測

今晩は南東の風曇後時雨
明日は北の風時雨
風晴

古河黒曜吟社句抄（五）

○瀧壺の渦にまぎれぬ落椿　九里秋岳
○椿落つかそけき音に鳥立てり　同人
○垣のぞく椿に日差しあまねかり　同人
○椿咲く僧房固く閉しあり　同人
○ほつ〜と芝生に赤し落椿　石堂柴雲
○掃き淨む寺跡ひろし落椿　同人
○渡舟待つ間の宿や櫻餅　高萩吐月

かむちやつか行人夫募

春光は明るし

平第三校優等生

（尋一の一）佐藤伸雄　田幹隆一　小野口寛二　阿部正伯　佐々木敏光　鄙波壽義　小野通靖　關內淳　大樂武男　阿部哲三
（一の二）鎌田克已　絲川正男　新妻俊夫　國井良益　河濟八郎　山野邊晃　大貫朝則　篠崎信和　篠崎惟
（一の三）味香尚子　塩谷嘉代子　大內知子　吉田美智子　鴫原萬子　蒲井智子　坂本義子　長京子
（一の四）猪狩千枝子　菊池秀子　西郡〆子　鬼塚英子　鈴木□□子　佐々木キヨ子　鈴木智子　原下惠美子
（二の一）松崎竹志　佐藤宏　新妻博　高橋光男　渡邊悟朗　岡田清雄　新家文芳　鈴木裕　志賀俊勝
（二の二）田代正見　市毛勉　芳賀平治　石井英之　園部和重　內海正高橋慶　大谷富雄　生谷猛
（二の三）中村朝子　坂本昭子　山部睦子　志賀和子　吉田輝子　大塚トキ子　馬目信江　和久本昌子　清水美津子
（二の四）鍋代照子　齋藤京子　猪狩麗子　高木和子　中野滋子　佐藤ミツ子　佐藤靜江　伊藤幸子
（三の一）國井英雄　新井唯一　篠原遂二郎　郡司一　箱崎勝　江尻信夫　會田正一　齋藤和男　小野保夫
（三の二）菅野亮　北川芳也　味香俊雄　諸橋文士郎　篠崎浩美　丹野信男　小林武則　志賀俊之　木田悟郎　野澤明
（三の三）關內俊子　岩村妙子　鈴木秀子　佐久間美都子　相澤英子　平松和子　石山ミヤ　芳賀チエ子
（三の四）小熊久子　田谷勝子　鎌田俊子　三井キヌエ　岡田圭子　佐川和子　塩谷久美子　稀本智惠子
（續）

講談 恩讐無道（59）

久我莊多郎　香川三十代畫

―天の卷―

乘合馬車（五）

『その御恩報じにも――こいつは押しつけがましい御恩返しですがあツしは、それをせずに氣が濟まないのです』

庄太郎は、ぐいツと強く

淚を拂つて、盤台の魚に手をかけた。

『食べていなさいけかすね？ お茅江さま』

『は、はい』

と、茅江は又しても、淚にむせぶのである。

この厚い情けを、これ以上に押し戻す言葉はない。

さうわかつてみれば、心の隅にまだ咎めるものはあつたが、こちらは、泣きぬれながら頷いた。

『有難てえ。片身は鹽燒きつてことにしませう。こいつは、トロもんぢやありませんよ、今朝品川沖であがつたんだから、御覧なさいピチ〜〜してゐるさあ』

手は、いそがしく庖丁を動かしてゐる。

『濟まない――』

實際、さうまでして貰つては、濟まないのだ。庄太郎としても、まだ〜新店の魚屋である。それだけに儲けるよりは損する日の多いことも考へられる。

それを拒めば、さつきのあの、淚まじりの強い言葉である。

だが、武士の家に正しく育てられた者が、人の情に甘えて、それを待つといふことは――すくなくも、深見兄妹の心持が許さない。

今朝も、惣介がそれをいつて出た。

『庄太郎が來たら、今日こそ斷るのだ。あれもこの家へ來してゐては損するばかりなのだから……』

わかつてゐた。勿論、茅江もその心でゐたのだが――さて、話してみれば、却て拒めぬ熱い眞實を受けるばかりだつた。

ほんとに、濟まない！

こちらこそ、この恩返しをどうすればいゝのか？

茅江がホロ〜〜淚ぐむうちに料理は出來上つた。

庄太郎は、それを持つて勝手口へはいつて行つたが、こんど出て來ると、茅江はまだそこに坐つてゐて、庄太郎の顏も見上げられないやうに、

『濟みません』

と濕つて小さな聲でいつた。

『またですかい。お茅江さま。さう遠慮ばかりなさると、あツしは本當に憎りますぜ。旦那にも、さういつてあくんなさい。お互ひ江戸ッ子ぢやありませんか』

『……』

茅江は、感謝の目を上げて、

『庄太郎さん。よかつたら兄の歸りを待つて、今夜は御一緒に御飯をたべて歸つて下さいませんか？』

『エッ』

と、男の目が、ぬれ色にかゞやいた。

『御馳走になつて、いゝでせうか？』

『構ひませんの。兄も、さぞ……』

『……』

默つて頭を下げたが、包み切れぬ歡喜が、卒直に、胸いつぱいに擴がつてゐることは事實なのだ。

庄太郎は、その心持をさとられまいとするやうに、

『坊ちやん、よく寢んでゐらつしやる。ほんとに、だん〜親御さんに似て來なさるなあ』

と、茅江の胸に抱かれて安らかに眠つてゐる子供の顏をのぞいた。

向ふは、何氣なくいつたのだらう。だが、茅江にとつて、いまの一言は、鋭い針で心の底まで突かれた想ひだつた。一ぺんに、暈をひんだ氣持である。

（この子の父は……？）

どうしてゐるかと、雲のくすゑ御門專藏のことを、思ひ出さずにはゐられなかつた。消息を斷つて四年、それでもちよまには、死者と考へられない御門專藏である。

成田講中
四月三日 平驛午前七時四十八分發 翌日午前成田解散
會費 金八圓五十錢 但待遇昨年同樣
定員 五十名 但締切三月三十一日
成田山大新榮講
講元 井上貞治郎 平市五丁目 電話六六番

吸入用酸素 純度99%
度量衡 モノサシ マス ハカリ
計量器 体温器 寒暖計
秤ノ取締 垂系・修繕致シマス。
關內藥局 電話四〇番

玉屋眼鏡店

鑑定項目
名前のみで一代の運命 何でもわかる……
体力 肉体 疾病（健康、不健康、相貌）（病根病勢、病名）に關する一切
活動 職業 天運（適業、不適業）（天運、成功、不成功、災厄）に關する一切
血緣 家族運 男女緣（父母の緣、夫婦の緣、子供の緣）有無（氣質、相性、相剋、婚期方位に關する一切）
銀行、會社名、商號、家號、會名、雅號、藝名、養子、養女、姓名、生兒名
日本姓名學會東北支部長 鵜沼孝昌 平市紺屋町 三六

家相 大數正 石島德長 鑑定
便利に住みよき新築住宅、地理家相の設計と製圖
採光保温通風、保健衛生上、合理的な、家相改善
病災火難の防止と、開運、長壽に確信ある新設備
僅少の改造工費で家運向上する、適確な秘法相談
地理家相 夫婦相性 適業撰擇 寄門遁甲 招福開運
鑑定所 平市白銀町 石島陰陽館 電話六五〇番

病室・手術室完備
產科 婦人科（物理療法科併置）
醫學博士 五十嵐雄二（入院隨時）
平市新川町（電話三六九番）

早春の― 小瀧は招く
一日の清遊には……どうぞ小瀧へ！
お迎へお送りに輕快な馬車の用意があります
鐵道指定旅館 割烹 小瀧 電話小名濱二〇三

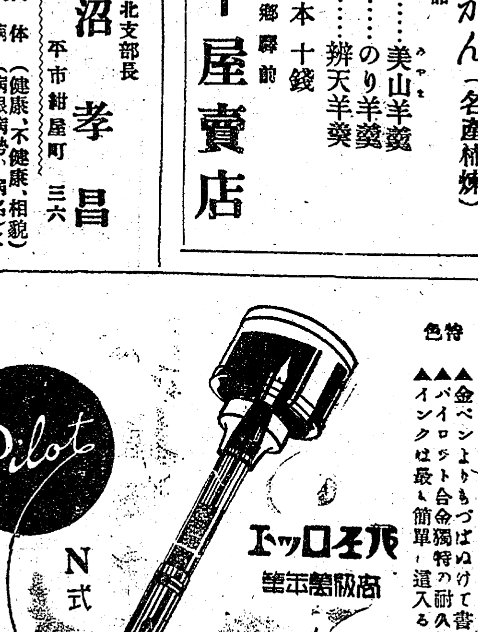
磐城の御みやげ品
名物 靈峰羊かん（名產柿煉）
姉妹品 磐城耶馬溪……美山羊羹
同 七濱……のり羊羹
同 豐間……辨天羊羹
◎各種 一本 十錢
製造發賣元 小川郷驛前 平屋賣店

重田眼科
眼科一般 眼鏡檢定
平驛前通り 元貯蓄銀行跡
醫師 重田景治 平市田町一番地

實株は買ツテ御手元へ 必ズ儲カル優良株
投資指針
●支那事變公債四萬圓マデ買マス
平市四丁目三十三 富岡株式店 電話二五八

銘木（床ノ間材）
天井板、ベニヤ板買ふなら
確かに御期待に添ふ良品廉價の
織田材木商店へ 磐城平驛前 電話平四六〇番
一度見せる勉強振りを、ぜひ一度お試しを乞ふ
營業種目 建築木材一式 銘木・ベニヤ板 秋田杉・杉四分板 建具材・便利瓦
●小店員募集 年齡十五歲ヨリ廿歲迄

N式パイロット高級萬年筆
國策により斷乎として金を使用して居りません
特色
▲金ペンよりもづばぬけて書きよい
▲パイロット合金獨特の耐久性
▲インクは最も簡單に這入ること



事變下入學進級の贈物として
最適品（お買上毎にN式用パイロットインク一個呈上）
特約店 マルトモ書店 平・四 電話 三二四 二二四

恐らく大勢順應か？
他方面並みに決定を豫想さるる
平市警防團の首腦幹部

愈よ來月一日から實施さるる警防團の組織に就ては消防、防空の一元的機構が如何なる態樣を以て發動するか陣首腦幹部の顏ぶれ等も多大の關心を以て其の發表を刮目されてゐるが既決の福島、若松、郡山縣下三市に於ける振り合ひを觀ると、團長、副團長、分團長の人選に就ては所轄警察署側と市當局とが緊密なる聯携の下に人物の詮衡檢討を遂げ、土地の多額納税者、市會議員、縣會議員等を網羅決定しある處か、觀て平市のそれも大体之の大勢に順應して夫々適材が擧げらるるものと豫想されてゐる

善行者淺原少年に 最初の市長賞授與
第一校式場に感激的情景

未だ十四歳の小兒乍ら、母亡き身の父を助け弟妹を慈しみ傍ら學業に餘念無き健にも健氣なる市內白銀町日傭業淺原權一さん長男平第一小學校尋常六年生信一君の善行に對し既報の通り今二十四日晴の卒業式席上左記の通り市長賞最初の受賞者として表彰され式場に感激的情景を見せた

表彰狀

平市平第一尋常高等小學校尋常科卒業生 淺原信一

意ゝ間に在りて刻苦精勵學業一日も怠ることなく克く六ケ年を精勵せり前に其母病床に臥すや看護孝養至らざるなく母亡き後は父を扶け幼き弟妹を慈しみ自ら勞して家計を助くる等其行動衆の模範たり依て茲に學帽並學生服を贈り之を表彰す

昭和十四年三月廿四日 平市長 青沼錦太郎

修卒業約五千名
けふ市內各小學校で擧式

市內四小學校の修卒業式け今二十四日午前九時から各校一齊に擧行したが卒業生徒數に修卒合計第一校千五百六十三名、第二校千四百八十八名、第三校千三百四十三名、第四校五百九十三名總計四千九百九十三名中

區分	尋常	高等
第一	一八八	一三二
第二	二〇五	一三七
第三	一九四	—
第四	七六	五五

合計尋常科六百六十三名、高等科三百二十四名累計九百八十七名で內優等生は別項の通りである

義勇軍出發

昨報二十八日壯行會に臨む縣下資性溫良沈着にして勤勉の滿蒙開拓青少年義勇軍言動を苟もせず其の成績百名は翌二十九日午前九時常に群を拔く又家庭不如平發で內原訓練所に向ふ

暴風被害

昨夜の强風で平署へ被害報告された主なる被害左の如し

小名濱日本水工場細工小屋二棟倒壞(百五十圓)同硫安倉庫ガラス屋根八坪破壞(百五十圓)同スレート屋根二坪(三十圓)△內郷村磐炭謎鐵道出張小屋及び便所倒壞(五十圓)磐炭病院板塀十間倒壞(七十圓)△小名濱町中明神町小野晋平氏板塀破損(十圓)同町横町丹野敬助氏有所屋根(十圓)

努力酬いらる
平第一校優等生

(尋一の一)志賀昭美 菊地淳 吉田貞雄 鈴木定之 古內榮一 中西胖 柏木昊三 柏原正治 萩原光夫 吉村茂 小野貞彥 小林賢藏 (一の二)稻島利雄 齋藤弘 岡野和夫 高橋仁志 山口吉朗 草野正之 堀仁二 稻川敏之 水野好 鈴木重 岩本清 格和利美 (一の三)高橋俊一 下山田尙史 鈴木雅光 高橋信幸 新妻文男 桑原進 坂本淸隆 高田誠 鈴木成實 蛭田容之 鹿澤實 (一の四)長瀨昇平 小原俊夫 蘭部英雄 酒井俊之 桐原剛也 遠藤英一 稻田盛郞 高木茂嗣 永木守 邊渡憲司 櫻庭重幸 三村謙吉 (尋二の一)櫻庭昭欣 菅本昭次 小川司郞 天野準平 堀江勝二郎 三浦邦雄 石井嚴 本田雄一郎 石山靖雄 富澤數馬 三井鈴治郎 (二の二)靑沼國雄 山野湧政豪 野崎嚴 石山涌雄 阿部計片寄透 石川照憲 江尻唯藏 田野入甫德 矢吹宗雄 新田邦夫 (二の三)渡銳二 根本武 齋部昭雄 大內寳二 佐竹央行 松本誠次 馬目偉太郎 渋澤貢 爪田健 根本正彥 鈴木薫晴 (二の四)柳瀨信 門馬勇次 市原英郎 成田謙二 新井民正 木村隆信 水谷和夫 皆川博 坂本文成 眞木一夫 佐藤光之 (尋三の一)松野尾宣之 市原卓耶 大高剛一 菅正保 吉田直政 佐々木庄一 平澤直人 篠原均 庄司正則 平野光男 中村幹男 伊關作平 牧野康治 (三の二)大井川準之助 橋本眞一 磯山豐司 三瓶政巳 新妻幹男 渋澤久二雄 吉村淸四郎 齋藤正吉 西牧昌巳 佐川富雄 島田青美 門馬敏 高田務 大原長英 鈴木昭 大塚勉 蛭田浩司 馬目英夫 山田政光 吉原功 増田則夫 佐藤喜芳 小野善朗 靑天目進一郎 東條祐博 (尋四の一)柴田章夫 佐藤紀文 伊藤利平 鈴木基司 山野邊久吉 岡田早苗 赤塚信一 村上拓夫 小林久夫 鈴木武男 (四の二)薗部武久 佐々木實 鈴木可一 船生喜八 岡井節夫 藤田丹 岡山一之 渡邊弘 遠沼淸夫 加藤明 大槻重雄 (四の三)鈴木久一 鴉沼秀夫 吉成晴保 金田秀夫 馬目修義 今宮和市 菅野壽悛 新田秀市 鈴木秀明 吉井涌雄 大和田武夫 (四の四)菅野滲雄 坂本政直 小林昌一 柏原泰祐 皆川勇一 吉田實 木田昭八郎 色川保三 田中敏郞 伊藤喜夫 永木義一

酒井辯護士
昨日急逝あす葬儀

市內揺槌小路辯護士酒井喜代正氏は一昨二十二日午後二時半裁判所辯護士控室にて發病手當ての効無く昨二十三日午前七時長逝した。享年四十八才、葬儀は明二十五日午前十時より午後二時迄自宅に於て告別式執行好間村龍雲寺に埋葬する。氏は好間村出身磐中第十回(明治四十三年)卒業、明大法科を出て辯護士試驗に合格、前記開業今日迄地方人の爲盡す處少くなかつた溫良の一面熱情の紳士として長逝を惜まれてゐる

改正税法を說明
關係業者を集め 平税務署で懇談會

目下議會に於て審議中の支那事變特別税法改正案は來月一日より實施さるる見込みなので平税務署では施行前之が改正趣旨の徹底を圖る爲左記日割により税務懇談會を開き、改正法案の要綱、税率區分並に免税點申告記帳の義務並に要綱を說明すると

二七日平市公會堂(平市飯野、高久、夏井、神谷草野、赤井、上下小川、川前、三坂、澤渡、永戶貧輪、好間、內郷)

二八日植田校(植田、勿來、山田、錦、川部、田人、荷路夫、石住、貝泊)

二九日小名濱校(小名濱江名、豐間、鹿島、玉川渡邊、泉)

三十日湯本校(湯本、磐崎、上遠野、入遠野)

三十一日四倉校(四倉町大野、大浦)

會同せしむべきもの

物品税印紙税に就ては商工業者全部

遊興飲食税については旅館、料理店、飲食店、藝妓置屋、貸座敷、カフェー、バー及び之に類似する業者

學校荒しの餘罪

既報、豐間小學校を荒して平署に擧げられた同村八幡町漁夫(一八)は追究の結果一月中江名町質屋新妻長藏方の質倉を破つて侵入、オーバ、衣類等八點(五十餘圓)を竊取した外以前にも豐間小學校から現金を盜んだことを自白

息子夫婦を危く毒殺
惡鬼の父平署に擧げらる

江名町仲の作底曳漁船平一丸漁夫山田壽太郎(三八)は二十二日夜十一時船から歸宅、妻タニ(三四)と共に彼岸の中日の前日つくつた殘りお萩を食べ始めると猫いらずが入つてゐたのに吃驚、早速附近の醫院で洗滌危いところで命拾ひした、屆出により平署で搜査の結果附近に住む壽太郎の實父藤松(六三)を有力な容疑者として引致追究中だが前後の事情から見て同人の犯行に間違ひないやうである、被害者壽太郎は鄉里新潟縣北蒲原郡松塚村で一人娘キクヨ(一〇)を殘して先妻に死なれタニを後妻に迎へたがタニは藤松と折合が惡く七年前江名町の知人を頼つて來郡魚行商をし間もなくその後を追つて來た壽太郎一家の近所に移つたが依然出入りもしない犬猿の間柄、最近これが愈よ昂じ藤松は『倅夫婦を殺して自分も死ぬ』と口走つてゐた事實もあり又犯行の當日可愛がつてゐた孫キクヨに『お萩は喰ふなよ』と注意したと、倅夫婦の留守を訪ひ恐るべき犯行を企てたものと見られる、平署では毒物の鑑定方を縣衞生課に依頼した

共犯更に一名
詐欺事件後聞

主犯鈴木昌雄の詐欺事件共犯者として更に二十三日夜市內研町保險外交員市島範三(三〇)が平署に留置された

平商建築委員會 平商業學校委員會を二十四日午後二時から開き新築校舍の一部變更に關し協議

成果に微笑む
第二小學優等生(生年月日順)

(尋一の一)佐竹永子 森下スミ子 柏原サト子 吉成芳子 大井川澄江 山崎弘子 國府田フヂ 中野サイ 赤塚裕子 田卷町子 白土萬里子 (一の二)橋本イク 村田元子 樫村かをり 横幕淑子 松崎理智子 庄司靜子 鈴木英子 新妻泉子 大原英枝 鈴木美代 (一の三)山森和子 神長會紀子 淺川浩子 大村藤子 渡邊翠子 增田智津子 星野富美 松本智惠子 熊敦子 大越千枝子 (尋二の一)藤井和子 小川直子 田卷佳代子 若松和子 大谷瑛子 吉田トシ 小谷陽子 宮川尙子 大嶺陽子 勝本エミ子 (二の二)齊藤敏子 鈴木キミ子 小齊トシ 齊藤トム 海老原エイ子 吉田きん子 白土京子 小野常子 小林充子 横山峯美子 (二の三)尾崎嘉子 叶田靜子 西脇アイ子 齊藤千惠子 鈴木キヨ子 飯島榮子 鈴木和子 岡田郁枝 眞野萬子 村上都子 (尋三の一)濱田芳子 齊藤和子 片寄永久子 松本歌子 吉田富子 山本ノブ子 稻田かよ子 市原和子 阿部嘉子 鈴木都 (三の二)小野武子 芹國府田ヨシ 原光代 武澤美佐子 山崎敏子 神田千枝子 遠沼裕子 佐永つや子 篠崎禮子 佐藤崎子 (三の三)山崎美知子 矢野利枝 佐久間マサ 菊地和子 大井美子 齋藤リエ 木田トキ子 山田文子 梅森宣子 吉田千枝子 (尋四の一)安齋照子 宮川幸子 服部桂子 益弘幸子 齊藤貞子 大村仁美 長谷川京子 齊藤英子 關原トシ子 力丸美知子 (四の二)神長倉公子 小齊睿子 谷口歸子 下山田方子 田卷まさ子 石川美子 高橋恭子 高木珠世 長谷川友子 渡田之子 (四の三)明智節子 藤田輝子 一之瀨禮子 市原惠子 小室智江 眞木靖子 關內美佐子 阿部美子 瓜田けい 當本シゲ (尋五の一)安藤敏子 高橋茂子 桐原純子 阿部比奈子 高田玉惠 吉原禎子 齋藤潔子 增尾幸子 三井正子 本間節子 梅森紀子 鈴木エチ子 渡邊マサ子 大谷輝子 大原昭子 草野キン子 中根和子 關內陽子 尾形正子 (五の三)吉田昭子 高木和子 原貴美 稻田良子 小松久子 田卷橋子 横山ケイ 高子テル子 伊坂昭子 石田カツ子

「兵隊さん有難ふ」
就職斡旋先づ滿點
平紹介所大よろこび

續々の手柄話しを土產とした歸還軍士は就職に關しては職業補導部等が中心となりその萬全を期してゐるのでどこも朗かな話題をかもして居り平職業紹介所扱ひによる此種就職斡旋の成績も先づ滿點だ、その大半は雇傭主の理解ある計ひによつて復職を見て居り殘る轉業希望者に對しては夫々希望に基いて各紹介所と連絡優先的に就職口の斡旋に努めることゝなつて居るので直に決定することいよ好調子同所では『これぞ身命を賭して闘つてくれた兵隊さんへの感謝のあらはれです』と喜んでゐる

寄附

市內田町横山美磐氏はその社中で十九日マルドモホールに鶴田德隆師を招いて開いた戰死者慰靈祭供花會の經費を節約金五圓を、磐城高女四年四組一同は送別會費を節約一圓三十二錢を代表千葉しず子さんから夫々市軍事後援會へ寄附した

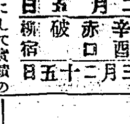
○磐城高女四年一、二、五組代表根本ゝね子さんは二十三日恤兵費四圓四十三錢を市役所へ寄託、送別會費を節約しての結晶である

忙しいお花見準備

花の松ケ岡へ臨時に許可する賣店は今年は都合で二等地を廢して一等六ケ所、三等三ケ所として目下申込みを受付けてゐるが申込みは未だ三名、明二十五日午後二時から抽籤で決定する 尙土木委員會は二十五日午後一時から開き公園北入口賣店敷地使用願、中腹稻荷位置變更、丹後澤水面使用願、櫻花宣傳立看板設定の諸件を附議する等愈よ近づいた松ケ岡の春の裝ひに大童である

二十五日(小名濱潮候所發表)
滿潮 前六、〇五 後七、一〇
干潮 前一二、二五 後一、五〇

新三月二十五日 土曜 舊二月五日 辛酉 赤口 破 柳宿



▲一白 計畫のみ大にして實績のこれにともなはざる日▲二黑 目前の大利を見ながらも手出しの出來ぬ日▲三碧 至誠を以てすれば何事も順調に運び行くべし▲四綠 出先きをつゝしめば他は順調にて心配はなき日▲五黃 外事にのみ熱中するときは內は空虛となる▲六白 午前の苦は一時のこと午後は樂となるべし▲七赤 調子に乘り過ろときは意外の失敗あるべし▲八白 氣の迷ひを去らされば進行愈々にぶり來るべし▲九紫 破れを含む日增築普請旅行等は見合すべし

乘合自動車女子車掌十名募集
十五才以上十八歳以下尋卒以上
採用の上は二週間見習の上本給を支給す
但し見習期間中手當及び制服を支給す
◉希望者は午前八時より午後四時迄御出を乞ふ
平市 野崎自動車合資會社

高久病院
平市田町 (電話五三一番)
醫學士 高久忠
新潟醫學士 赤羽潤
藥劑士 佐竹幸雄
內科 小兒科
外科 花柳病科
耳鼻咽喉科
(看護婦至急募集)

事務員、技工招聘
小林齒科醫院
昆野隆好
診療所(仙臺市東一番丁七番地 仙臺市錦町二五一)電話三二七六番
◉御希望の方は書面御照會を乞ふ

耳鼻咽喉科 專門
平市南町一六番地
大和田醫院
電一七〇番
(入院隨意 病室完備)

看護婦至急募集
(委細面談)
高柳醫院

父喜代正今朝突如死去仕候間此段御通知申上候
追て葬儀は三月二十五日午前十時より午后二時まで平市揺槌小路宅に於て佛式により告別式相營み可申候は時局柄御供物等は固く御遠慮申上候
昭和十四年三月二十三日
男 酒井喜一
親戚總代 松崎銀之助
永山勇吉
友人總代 新田目善次郎